

実践と研究を編む

(1) 「教育臨床社会学」という専門性

研究推進委員会・副委員長を仰せつかっております望月由起です。これまで主に学会誌編集委員として本学会に携わってきましたが、山田智之研究推進委員長の掲げる「実践と研究の懸け橋に」という旨の考えに賛同し、今年度より研究推進委員として(も)勉強させていただいています。

今回から4回にわたって、「実践と研究を編む」をテーマに連載を書いてみたいと思います。コロナウィルス感染症の影響が出る前には、学会大会中の休憩時間や懇親会等で雑談を交えながら話していたような内容です。肩肘張らずにお読みいただけますと幸いです。

キャリアに関する研究をしていると、「ご専門は何ですか？」といった質問(や確認)をされることはありませんか？私の場合、現在の所属からいえば「教育学です」と答えるのが無難な回答なのですが、私は教育学系の学部を卒業しておらず、そこを卒業した学生であれば一度は耳にしたことがあるような人名や用語を知らないことも未だにあるため、「専門は教育学です!!」と胸を張って答えることは憚られます。

では私は学部時代に何を専門としていたのか(専門というレベルではありませんが)と言え、主に臨床心理学を学んでいました。卒業論文では、300人以上の大学生を対象とした質問紙調査を行い、「同じ相談内容でも、相談相手によって求める対応や回答がどのように異なるか」についてまとめました。その後、大学進学予備校に就職し、教育現場でのさまざまな経験を積むにつれて、「実践者である自分にとって有益な学問を学び足したい」という気持ちが強まり、教育学・心理学・社会学の学際領域を扱う母校の大学院で社会人院生として学び足すことにしました。そこで教育社会学を専門とする教員の指導を受ける縁があり、私の研究の専門性もその方向に水路づけられていきました(結果として、私の学位は「博士(学術)Ph.D.in Sociology」です)。しかし学部時代に心理学を学んだためか、学部卒業後に教育現場での実践経験を蓄積したためか、大学院修了後に複数の大学でセンター所属教員として勤務をしたためか…、社会学や教育社会学領域での問題関心や考察に対して違和感を抱くことが少なからずあり、大学院で「教育社会学特論」なる授業を担当している今でも、「専門は教育社会学です!」とは言い難い日々が続いています。

その違和感の正体を探りつつ、自分の専門性として、最近ようやくたどり着きつつあるのが「教育臨床社会学」という領域です。教育社会学の中で細々と存在しているような領域であり、教育社会学者からですら十分に認知されていないかもしれません。ですが、私はこの専門性をキャリア教育の研究や実践に生かせるのではないかと考えています。

教育臨床社会学の基本的な問題意識は、「社会学としての性格を保ちつつ、さまざまな問題を抱えた学校教育をどう改善すべきか、教師の実践的指導力を向上させるにはどうしたらいいかという、現場が直面する喫緊の課題に対して、教育社会学にいかなる可能性があるのか(酒井 2014)」という点にあります。ここでいう「臨床」という言葉には、「研究者が教育の現場に立ち会おうとする姿勢」や「研究者と実践者の関係の編み直し」といった意味が含まれており、「対象の観察の仕方についての捉え直しであり、具体的な場に即して、その場固有の意味世界の中で問題の意味を捉えること」や「そこから教育的日常を支えている物語を異化し、新しい意味や筋立てを構築していくこと」が、この領域では求められます。調査に基づく量的・質的データの分析、言説の時系列的な分析等を用いて知見を得るとともに、「どのように現状を改善すべきか」「子どもの成長やさまざまな教育問題をどのように把握すべきか」についても、複眼的な視点から考察を深めることを目指しています。

その際に私が特に留意しているのは「実践と研究を編む」という感覚であり、「研究者世界でのみ解読可能な、あるいは教育ムラの住人だけが賛成できる処方箋は、課題解決に向けた説得力を持つことはない(耳塚他 2019)」という点です。特定の専門性を共有するムラの中で学術論文をまとめたり、学会誌への投稿論文を執筆したり、学会大会にて研究発表をするような場合とは違い、実践と研究を編むには、両者の世界で通じる手法や言葉を用いて、両者が納得できるような考察を行う必要があると考えています。

連載初回である今回は、自己紹介を兼ねて、自分の研究の専門性について簡単にお伝えしてみました。残る3回の連載では、テーマとして掲げた「実践と研究を編む」ことについて、今回ご紹介した教育臨床社会学からの視点や話題の提供をしていきたいと思っています。

この領域自体がまだ発展途上であること、さらには私自身がこの領域において(も)未熟者であり、手探りの中でのぼんやりとした連載内容になるかと思えます。それでも「面白そうだな」「一緒に実践と研究を編んでみたいな」と思われた方がいらっしゃれば、ぜひともご一報ください。

【引用・参考文献】

- ・耳塚寛明,中西祐子,上田智子編著(2019)『平等の教育社会学:現代教育の診断と処方箋』
- ・酒井朗(2014)『教育臨床社会学の可能性』勁草書房.

(日本大学文理学部教育学科 望月由起)